

「本部」反動分子による 組合財政私物化の実態

1979年度決算で四億六千七百万円の赤字！

八 鍬 メ モ

本部会計処理について
選挙闘争を含めた赤字処理のため「スト生活資金」の振替え運用は止むをえなかったとはいえ、当然にも所定の手続きをもつて行うべきであった。弾圧対策などのこともあり措置したものであるが、本部は第三六回全国大会で陳謝し、承認を求めることとする。以上のことを本部は受け止め、今後の執行に生かしたい。大会での討論は外部関係のこともあり、慎重なる対処を期待したい。

一九八〇年八月二日

本部執行委員長 八 鍬 重 一

なんとこれは、「本部」反動分子が牛耳る八鍬

執行部が一九七九年度（七九年四月～八〇年三月）会計決算で闘争資金会計四億六七〇〇万円という未曾有の赤字を出し、それを全国大会の承認もなしに勝手にスト生活資金会計から流用し穴うめたことを、一べんの陳謝でことをすませ、全国大会での論議を封殺せんとするものである。これこそ組合員の貴重な財産である組合費を湯水のごとく浪費して未曾有の赤字を出した自からの執行責任をタナに上げ、規約・規則を無視して赤字の穴うめ＝資産の食いつぶしを行う「本部」革マル執行部の動労私物化の実態をさし示すによりもの証左である。

動労「本部」の財政的破綻は、
今やあきらか

動労千葉は、「本部」反動分子による動労私物化を許すならば路線的破綻はもとより、財政的にも動労は破綻するであろうと警鐘を乱打してきた。事態は、その通りに動き熊本大会以降一年にして財政的破綻が表われてきた。

動労「本部」の一九七九年度闘争資金会計の決算書によると、闘争資金会計一九七九年度予算四億四四七四万円のところ支出は九億一二六六万円であり、赤字は四億六七〇〇万円も出している。つまり、これは、年間予算の倍額を使いはたすという、全くデタラメな財政運営をしているというものであり、動労組合員の中から不満が出ることは、けだし当然である。

しかも、一九八〇年四月～六月の僅か三ヶ月の間ですでに闘争資金を三億八千万円も使いはたしたというのではなおさらである。
いまや動労「本部」の財政は、結成以来の破産

的危機におちいったといえよう。

赤字を組合員に転嫁する「本部」

このボウ大な赤字を生みだした責任は、革マル執行部によるズサンな財政運営であることは言うまでもないが、そののみにとどまらず、反合闘争を放棄し動労千葉破壊のために巨額の組合費をつぎこみ、展望のないままに全国動員をかけて動労組合員をひきまわし、そこからくる組織的破綻をとりつくりうために目黒選挙を利用した「本部」反動分子の邪悪な政治的意図と路線的破綻によって生み出されたものである。

このボウ大な赤字の穴うめを革マル執行部はどのように処理しようとしているのか。

決算書によると闘争資金会計赤字の穴うめについては、スト生活資金会計から二億円、第二闘争資金から一億一九九万円、その他から一一九九万円を流用し、赤字繰越し約一億五五〇〇万円として処理しようとしている。このやり方は、革マル執行部のツケを動労組合員に押しつけるという動労私物化の典型である。スト生活資金は、闘争の際の賃金カットにそなえて積み立てるものである。長期闘争にそなえ組合員の一ヶ月分の賃金相当額の積み立てを展望して設置されたものである。第二闘争資金についても趣旨は同様である。これを赤字の穴うめにまわすことは事実上の組合費値上げである。さらに、翌年に繰越される赤字約一億五五〇〇万円は直接組合員の負担にかかってくるものである。

このように組合資産を食い潰し、自からの指導責任には口をぬぐってしらを切る革マル執行部に私物化された動労の将来は暗たんたるものである。

日刊
動労千葉

80.8.23

No. 515

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二五八・九（公衆）品三二二七二〇七